

## 6月の「どんぐりsカフェ」から 郷土に伝わる独特的なチマキ作りに挑戦

「春日井の郷土に伝わる端午の節句のちまきを作ろう」と題し6月29日、坂下公民館を会場に「どんぐりsカフェ」を開催しました<sup>写真</sup>。この地域に伝わるちまきは、通常の笹でなくフモトミズナラの葉で包みます。高森山の木から葉をお裾分けして貰い、会員の皆さん協力で必要な枚数を集めることができました。また、蒸すのではなく茹でるのも特徴の一つで、中にヨモギや菖蒲を入れるのもこの地域の慣わしです。

茹でる間、調理室がヨモギと菖蒲の葉の香りに包まれ大変癒されました。ちまきを葉巻き、最後に藁の紐で縛るのにコツが必要でしたが、会員でこの日の講師の倉知加代子さんに丁寧にご指導頂き、皆さん美味しいちまきを完成させ

役員会から

●7月初旬に、「どんぐりs」の役員15人のうち6人が（疑いを含め）新型コロナに罹るという非常事態が発生した。ワクチンを何回もうっていたおかげか、全員がほぼ軽症で済んだ。しかし、7月13日に予定した役員会が休止となったほか、感染防止で感染者が自宅隔離を長期間強いられ、高森山での小学校との合同イベントが中止になるなど会の活動は大きく阻害された。●本会の重要なイベント「高森山でツツジを見よう会」は、2年続けてコバノミツバツツジの開花が遅れ、つぼみの開催となった。来年から開催時期を遅らせ、「ハナモモまつり」と共同開催にしたらどうか、という意見も出た。が、過去2年が異常だったとの見方もある。共同開催には人手など問題もあり、予定通り3月29日（土）に単独開催の方向で固まりつつある。



る事ができました。

また、旧暦の端午の節句に厄除けの飾りも作っていることを教えて頂き、縄に奇数枚のヨモギと菖蒲を付けて実際に作らせて頂きました。今まであるのに知らないことばかりで大変勉強になりました。昔からの食の文化や風習を守り伝えていけるように今後この様な機会がまた持てるといいと思います。  
(作本 あゆみ)

### 住まい困りごと無料相談

電話または直接面接会場にお越しください

☎080-5297-8956 (長谷川)

面接相談会日・会場

8月11日 (日) グルッポふじとう

9月15日 (日) グルッポふじとう

(いずれも13:30~15:30)

●当会会員の一級建築士が相談に応じます。

### ハート・ほっと・ルーム

●開催日・会場

8月25日 (日) 養樂福祉会たかもり

9月22日 (日) 養樂福祉会たかもり

二春日井市高森台5-6-6

(いずれも13:30~17:00)

参加費：無料

連絡先；☎090-6330-4393(浪川)

## オオムラサキセンターに研修視察 蝶を育てる多様な環境を セットで守る大切さ学ぶ

どんぐり s の役員  
有志10人が7月9日、  
山梨県北杜市のオオムラサキ自然公園  
(オオムラサキセンター) に研修視察に  
訪れた。センターでは名誉館長である跡  
部治賢氏に館内を案内していただいた。



本館でオオムラサキの生態と生息する里山環境について映像を使って解説を受けた後、生態観察施設びばりうむ(1400m<sup>2</sup>)で沢山のオオムラサキを観察することができた。6月中旬から羽化する成虫は約500頭と言われ、羽化したばかりの色鮮やかな青紫色に輝く開長10cmほどの雄(写真)、一回り大きく茶色地の雌、エノキの葉に擬態した緑色の蛹など、力強く堂々とした風格で国蝶の名に相応しいと感じた。

施設内では樹液の代わりとして桃の果肉と焼

酎、カルピスを混ぜ発酵させたものを与えていた。見学していた児童や大人たちもオオムラサキの姿に歓声をあげていた事が印象的であった。

今回の研修では「保護する」とはこういう事なのかと認識を新たにし、大いに参考になった。オオムラサキが生きていくうえで幼虫の食樹であるエノキや樹液の出るクヌギやコナラ林だけでなく、本来生息している里山環境をセットで保全していたことである。小川あり、沢あり、畑、棚田、水生植物の沼、メダカの池、トンボ湿生植物の沼、水生生物の沼、ホタルの水路等、実に多様な環境を保っていた。(山口 正恵)

## 河川美化で楽農会に感謝状

7月24日、名古屋市庄内川河川事務所において、活き活き楽農会が長期にわたり、河川の美化・愛護に努めていることが評価され、名譽ある表彰状が授与されました。国交省中部整備局長から石川彰子会長に感謝状が手渡されました。その後、石川会長が「美しい玉野を守るために引き続き環境保全に邁進したい」とのスピーチを行いました。これからも「美しい玉野を守る会」の環境保全の一環として、定期的に清掃を続けていきたいと思います。(堀内 泰)

### 私の朝・昼・晩

#### 能登被災地のボランティア

私は、6月2日から一週間、能登半島地震の被災地へ障がい者等支援のボランティアに行きました。東日本大震災、熊本地震の被災地に次いで3回目ですが、そこで感じたことを紹介します。

その1、被害が特にひどかった輪島市と珠洲市の2カ所を見学しました。輪島市では輪島塗会館の大きなビルが横倒しとなり、全焼した朝市通りは、原爆投下直後の広島を思わず焼け跡が広がっていました。珠洲市内では有名なお寺の屋根が落ち、多くの住宅が倒壊し住む場所もありません。輪島港は4mも隆起し、地震のエネルギーのすさまじさを実感しました。

その2、半倒壊した全盲の方の家の片づけをしました。家財道具、電化製品、アルバムなどを燃えるゴミ、燃えないゴミと分けてガレージに出す作業をしてきました。何十年も住んでいた懐かしいものを、これもあれも捨てていいかしらと思いつつ片づけてきました。

その3、輪島市にある障がい福祉サービス事業所は、七尾市和倉にある拠点のセンターから車で約1時間半かかります。そこでは見守り、支援、コーヒー豆の選別、ハシ入れ箱折り作業をしてきました。利用者に対して近くで見ているという感じです。作業最終日に利用者さんに挨拶したら「今日で最後だね。さようなら」と言ってくれました。私を覚えてくれていた、とうれしくなりました。

その4、温かい心遣いに感謝。和倉にあるセンター前に住んでいる本田さん宅からは朝食の味噌汁、夕食には肉野菜の差し入れ。金曜日にはオールメンバーの呑み会にも付き合ってくれました。本田さん自身も被災したにも関わらず、心温まる心遣いに感謝します。また、センターから和倉温泉の総湯回数券を6枚配布され、毎日温泉に入ることができ、1日の疲れをとることができました。また、時間を見てボランティアに行きたくなりました。

(近藤 左千夫)